

頭翼思想からみた近代日本の平和思想の意義と限界

鮮文大学（矢ヶ崎秀則）

——日本国憲法を中心にして——

はじめに

人類は20世紀において第一次世界大戦、第二次世界大戦と大きな戦争を2度も経ながら、ようやく平和な世界が到来すると思われたにもかかわらず、ソ連を中心とする共産主義陣営とアメリカを中心とする自由民主主義陣営との対立という冷戦がはじまった。そして、20世紀末、この冷戦はソ連の崩壊という中で、終息し、これにより、平和世界が到来するのではないかと思わせたが、その後の歴史は、それが幻想であったことを如実に示している。

ところで、本論で主張する頭翼思想とは如何なる思想であろうか。この点、李相憲統一思想院長は次のように定義している。

「頭翼思想とは、右翼でもなく左翼でもなく、より高い次元において両者を包容する思想という意味である。神の愛を中心とした新しい価値観による愛の精神をもって、左の思想である共産主義からは、憎悪心、闘争心や物質主義を取り除き、右の思想である民主主義からは、利己主義、自己中心主義を取り除いて、対立する両者を和解せしめ、共同して、神と人類の宿願である理想世界の実現に向かって進むように導いてゆくための思想が、神主義であり、頭翼思想である。」¹

統一思想の創始者である文鮮明先生は、次のようにその言葉を定義している。

「最近先生が話をすれば、頭翼と言って、頭に対する話をたくさんします。頭翼であると言えば、それは神様を中心として、すなわち頭を中心として、神経器官、脊椎神経を通して、四肢五体が全部連結されているのです。組織が連結されています。右翼とか左翼とか、どこから起こったかと言えば、イエス様を中心として、右側の強盗と左側の強盗から起こりました。我々の原理で言えば、カイン・アベルの歴史的分立を中心とした復帰摂理の基盤のもとで、それが始まるようになったのです。それを我々は知っています。右翼によって民主世界を全部抱いたとしても、左手がこれを覆ってくれるとか、相対になって一つにならなければ、これを抱いていくことはできないのです。また、左翼が全部抱いたとしても、右

¹ 李相憲 「統一思想要綱」 序文 ソウル：成和出版社 1993 p2 頭翼思想と関連して
神主義について、小山田秀生日本統一思想院長は、「神主義の本質は何かというと、神中心主義と人本主義と物本主義、これらを全部あわせたもの、つまり目に見えない神を親として、人間と一切の万物、鉱物世界、植物世界、動物世界そして、霊界まで、これらが完全に家族構成をなし、円形あるいは、球形社会を造成するということです。これが神主義です。ですから、神中心主義とは違います。」と述べている。 小山田秀生 「神主義と頭翼思想」 光言社 1989.p.20

手が抱いてあげなければなりません。このことを知らなければならぬのです。（一六二—九七）²

ところで、頭翼思想は、ともに生きともに栄え、正義の世界を打ち立て、神主義による愛に基づいて生活するという理念であるが、そのような世界は、最低限、戦争のない状態においてはじめて、実現される理想である。その意味において、平和という問題は、それをどのように定義するにせよ、一つの政治理想を成就しようとする際、もっとも重要で基本的な問題であるということが出来る。本論文では、頭翼思想が出現する以前、日本の近代思想の中で芽生えた、平和思想を分析するとともに、それが、どのように日本国憲法思想とつながりをもつかを考察し、今後、頭翼思想に基づくアジア共同体の形成を考察しようとするものである。

近代日本の思想的系譜

近代日本の政治思想にはいろいろあるが、大きな軸としてとらえると二つの思想に分けることができる。一つは、大国主義であり、もう一つは小国主義である。まず、この大国主義の定義からみてみよう。

軍事力・経済力などが強大な大国が、他国や他民族に対して支配的立場にたち、自国の立場や主張を押し付けること。16世紀から形成された国際社会は、大国による植民地支配、他民族抑圧のうえに成り立っており、大国が支配的地位についていた。したがって、大国主義は、国際関係において普遍的であった。³

もう一方の小国主義は、どうであろうか。よく、小国は大国に多大なる関心を持つのに対し、大国は小国にそれほどの関心を示さないといわれるが、辞書においても、大国主義という用語がほとんどの日本の辞典に出ているのに対し、小国主義を定義している辞典は、ほとんどない。だが、このことは、小国主義という考え方が日本に、全然なかったということの意味しない。実際、類似するものとして小日本主義という主張はあったのであり、その内容を加味しながら大国主義との対比の上で、小国主義を定義すれば次のようになる。

「国際関係において小国が、力を背景として、膨脹・拡大を志向するのではなく、道義を中心として内なる充実をもとめ、対外的には平和的協調関係を主張する」

ところで、この大国主義と小国主義の問題に関して、江戸時代から、明治時代に転換して、間もないころ、まだ、日本の進路がどのような方向性に行くべきか、模索しているころ、日本の一学者、中江兆民（1847—1902）によって提起されたことは、興味深い。とりわけ、その著「三酔人経綸問答」という題名は、三人の論客が酒を飲みながら国際情勢を論じるものであるが、題名は漫画的戯画的であるけれども、その内容において、国際政治の本質に対し深い洞察に立脚している。それは、時期的には、大日本帝国憲法発布の直前、つまり、絶対主義天皇制が、確立しつつある時期であった。

² <http://furuta65.fc2web.com/nanbokutouitu/5-6-3.html> （検索日 2012.12.28）

³ 土生長穂 日本大百科全書 小学館

ここで、三人の論客の主張をみてみよう。まず、小国主義的理想主義を主張する紳士君は日本の行くべき道は、軍事国家の道ではなく、道義国家としての道をゆくべきであるという。

「小国のわれわれは、彼ら〔大国の人々——著者〕が心にあこがれながらも実践できないでいる無形の道義というものを、なぜこちらの軍備としないのですか。自由を軍隊とし、艦隊とし、平等を要塞にし、博愛を剣とし、大砲とするならば、敵するものが天下にありましようか。」⁴

こうして、紳士君は道義を中心とした非武装平和論を主張するのである。これに対し、政治における力の役割を強調する豪傑君は、次のように反駁する。

「そもそも戦争というものは、学者風の理論からはどんなに厭うべきものであっても、現実の事実としては結局避けることができない勢いというものなのです。——争いは個人の怒りである。戦争は国の怒りである。よう争わないものは、弱虫である。よう戦争しないものは、弱国である。もし争いは悪徳で、戦争はくだらぬことだという人があれば、ぼくは答えていたい。個人に現に悪徳があるのを、どうしようもないではないか。——現実というものをどうしようもないではないか。」⁵

要するに、二人の論点は、一人が、非武装の道義国家をうちたてるべきとの理想主義的主張であるのに対し、もう一人は、そのような論議は、学者の空論であって、現実には、弱肉強食の世界である。したがって、弱小国の生きる道は、軍備を拡大し、他の弱小国を獲得し、力をつけ大国になる道である。こうして、海外膨張の道をあゆめば、自動的に国内にいる不満分子たちのはけ口となり、国が安泰になるというものである。そして、第三者である南海先生は、二人の激論を聞きながら、その折衷案を提示するという構成をとっている。⁶

ところで、植手通有教授によれば、この議論にみられる紳士君と豪傑君の対立の基礎に、「現実にたいするかかわり方の相違」があると指摘する。「紳士君の場合には、現実を踏まえているが、もっぱら現実がいかにあるべきか、ないし、現実をいかにすべきか、という観点に立って、現実に働きかけていこうとするのに対して、豪傑君の場合には、——もっぱら現実がいかにあるかに即して、現実に対応する方策をたてている。」⁷そして、紳士君の立場を理想主義、豪傑君の立場を現実主義と規定している。

⁴ 中江兆民 三酔人経綸問答 岩波文庫 1985 p.34-35

⁵ 同上 P.62-63

⁶ 南海先生自身の方策としては、多国間の友好関係の重要性を唱える。そして、紳士・豪傑両君の論を論評した上で、外交上の良策とは決して奇抜なものではない、と結んでいます。

ふだんの雑談のときの話題なら、奇抜さを争い、風変りをきそって、その場かぎりの笑い草とするのももちろん結構だが、いやしくも国家百年の大計を論ずるようなばあいには、奇抜を看板にし、新しさを売物にして痛快がるというようなことがどうしてできましようか。

中江兆民 三酔人経綸問答 岩波文庫 p 109

⁷ 植手通有「兆民における民権と国権」(「中江兆民の世界」収録) (東京：岩波書店,1977 p.79

そして、現実政治においては、近代国家日本は、紳士君の路線をとるのではなく、小国から大国への道をめざしたドイツ帝国を模範にしながら、豪傑君の大国主義路線を採択したのであった。

日清戦争と日露戦争の勝利は、それまで大国とみられていた中国とロシアとの戦争に勝利したことにより、国民にナショナリズムを高揚させ、大国日本を唱導する思想家が一世を風靡した。その代表的な思想家、徳富蘇峰（1863－1957）は、大日本膨張論を主張した。彼は、日清戦争の開戦を契機に、膨張的日本を主張しつづけた。そして、この戦争を三百年來、収縮的日本が一大飛躍して膨張的日本となる機会であると表現したのである。⁸

中江の著書、「三酔人経綸問答」に見事にえがかれているように、日本近代史は、この3人の論客の口を借りて当時、日本の現実の中にあつた三つの要素がいわば、分解して、対立しあい、からみあいながら展開したものであつた。⁹

一方、この洋学紳士の系譜は、内村鑑三、矢内原忠雄、南原繁らの無教会派に受け継がれ、非戦論となって結実した。これに対し、豪傑君の系譜は、徳富蘇峰、三宅雪嶺、北一輝につらなり、軍国主義となり、中日戦争へと突入した。そのさい、軍部が空想した満州遷都が、すでに豪傑君によって構想されている事は興味深い。そして、第二次世界大戦の敗北により、この豪傑君の路線は、破綻し、紳士君の路線が復活したのである。これが、日本国憲法である。

日本国憲法制定経緯

1945年8月15日、日本は、連合国の発するポツダム宣言を受諾した。同宣言は、日本軍の無条件降伏と完全な解体を定め、日本の領土主権を本州、北海道、九州、四国等に限定すると同時に、日本政治の根本原則も定めていた。民主主義的傾向の復活強化、基本的人権の尊重、平和政治、責任政治、日本国民の自由に表明する意思による政治形態の決定(国民主権)などであつた。また、このような原則に基づく新秩序が建設されるまで日本を占領下におく旨も定められていた。しかし、日本側は、ポツダム宣言受諾後も、〈国体〉(天皇主権)の護持に固執して、その要求にこたえるために明治憲法を改正する必要はないと考えていた。1945年10月、連合国最高司令官マッカーサーは、日本政府に二度にわたって、ポツダム宣言を受諾した以上明治憲法を抜本的に改正すべきだと勧告した。政府(幣原喜重郎内閣)は、これを受けて国務大臣松本烝治を主任とする憲法問題調査委員会を設置した。しかし、保守的な松本は、明治憲法を根本的に変更することなく、天皇主権を維持する草案を考えていた。

ところが、極秘裏にすすめられていた憲法改正作業が、2月1日の毎日新聞のスクープにより、一般に知れわたることになった。マッカーサーは、当初、この改憲作業に対し、関心はいただいていたものの、介入することはなかった。しかしながら、この毎日新聞のスクー

⁸ 徳富蘇峰「戦争と国民」民友社収録

⁹ 塩田庄兵衛 「19世紀から20世紀へ」——兆民と秋水——」（東京；筑摩書房,1977）p.177

プにより、GHQは、そのあまりに保守的な内容におどろいた。¹⁰ この案のままでは、戦前の体制とほとんど変わることがなく、連合諸国が懸念をいだいた日本の軍部の台頭に対する代案や民主主義を保障するものはなく、この案が正式に公表されれば、日本に対する強硬論の火に油をそそぐことになるのは明白であった。そこで、2月2日に、マッカーサーの側近であるホイットニーは、マッカーサーに対し、憲法改正の指針を提示することを助言したのであった。

マッカーサーは、これを受け、象徴天皇制、戦争放棄、封建的諸制度の廃止を含むいわゆる、「マッカーサーノート」とよばれる三原則を提示した。これが、日本国憲法の骨子となったのである。

ところで、この憲法制定過程に対し、これは、マッカーサーが日本側の意向を無視して一方的におしつけたものだと主張するものがある。日本が敗戦をし、ポツダム宣言を受諾し、マッカーサーの指揮下にはいったのであるから、「押しつけ」は当然のことであるが、「日本側の意向を無視して一方的に押し付けた」という主張は、必ずしも妥当ではない。20数年間にわたって占領軍の文書を研究している筑波大学の進藤栄一教授は、衆議院の憲法調査会で注目すべき発言をした。それによれば、スタンフォード大学にラウエル (Milo E Rowell) 文書というのがあり、その中に、19世紀の自由民権主義者である植木枝盛 (1857-1892) の憲法案が翻訳されており、日本国憲法制定の際、GHQ 民生局のラウエルは、彼に注目し、これを基軸として新しい憲法構想をふみだしたというのである。¹¹ これが事実であるとするならば、大日本帝国憲法制定時に無視されたキリスト教思想をもっていた植木の憲法草案が、日本国憲法において、復活したことになる。

また、1946年5月27日付の毎日新聞の世論調査でも、日本国憲法草案の戦争放棄については、国民の約70%が「この条項は必要」と答え、日本人が主体的に選び取ったことがわかる。半世紀において、幾度も繰り広げられた戦争に対し、もう、二度と再び、戦争をおこしたくないという国民感情が、この戦争放棄条項の支持につながったのであろう。

憲法前文は次のように締めくくっている。「日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う」¹²ここでは、憲法が国際社会の平和と安定に積極的な役割を果すことを国家の理想としてはっきり明言したことである。そして、大多数の国民がその憲法を支持してきたのである。

憲法9条は誰が発案したか。

ところで、日本国憲法の一大特徴は、なんと言っても戦争放棄のみならず、国の交戦権と一切の軍備の保有を禁止した憲法9条である。この憲法9条の発案に対し、改憲論者のおおくは、先に見たように、これをマッカーサーによる押し付けであると主張している。だが、マッカーサーは、その回顧録をはじめ、アメリカ議会での証言でも幾度か、マッカーサー発案説を否定している。彼によれば、当時の首相幣原喜重郎が発案したというのである。¹³

¹⁰ 憲法問題研究会編、「憲法読本上」(東京：岩波書店,1983) p.36

¹¹ 進藤栄一 衆議院憲法調査会での証言(2001.4.6)

<http://www.jca.apc.org/~nomad/kenpo/data/shu00406.html> (検索日 2002.7.13)

¹² 日本国憲法前文

¹³ 戦争放棄を新憲法に盛り込む発想は、46年1月24日のマッカーサー・幣原会談にあった

「日本の新憲法にある「戦争放棄」条項は、私の個人的な命令で日本に押しつけたものだという非難が、実情をしらない人々によって、しばしばおこなわれている。これは次の事実が示すように真実ではない。旧憲法改正の諸原則を、実際に書き下ろすことが考慮されるだいぶ前のこと、幣原首相は、当時日本ではまだ新薬だったペニシリンをもらって、病気がよくなった礼をのべるため、私に会いたいといってきた。それは、ちょうど松本博士の憲法問題調査会が憲法改正案の起草にとりかかろうとしている時だった。幣原男爵は1946年1月24日の正午に、私の事務所をおとずれ、わたしにペニシリンの礼をのべた。——首相はそこで新憲法を書き上げるさいに、いわゆる「戦争放棄」条項を含め、その条項では同時に日本は軍事機構を一切もたないことをきめたいと提案した。そうすれば、旧軍部がいつの日かふたたび権力をにぎるような手段を未然に打ち消すことになり、また日本にはふたたび戦争を起こす意志は絶対がないことを世界に納得させるという、二重の目的が達せられるというのが幣原氏の説明だった。——わたしは、腰が抜けるほどおどろいた。長い年月の経験で、私は人を驚かせたり、異常に興奮させたりする事柄にはほとんど不感症になっていたが、この時ばかりは息もとまらんばかりだった。戦争を国際間の紛争解決には時代遅れの方法として廃止することは、私が長年熱情を傾けてきた夢だった。現在生きている人で、私ほど戦争と、それがひきおこす破壊を経験した者はおそらく他にあるまい。——原子爆弾の完成で私の戦争を嫌悪する気持ちは当然のことながら最高度に高まっていた。わたしが、そういった趣旨のことを語ると、今度は幣原氏がびっくりした。氏はよほどおどろいたらしく、私の事務所を出る時には感極まるといった風情で、顔を涙でくしゃくしゃにしながら、私の方を向いて、「世界は私たちを非現実的な夢想家とあざけるかもしれない。しかし、百年後には私たちは、預言者と呼ばれますよ。」¹⁴といった。

これは、マッカーサーからの証言であるが、幣原の側からもそれを裏付ける証言がいくつかなされている。

憲法9条の発案者がだれであったかをめぐって、丹念な取材を重ねた上で、「平和憲法創作記」を書いた人に、元朝日新聞政治部長の細川隆元がいるが、彼は、マッカーサー説、幣原説の両説を取る人々を次々に取材した上で、最後に幣原の側近中の側近といわれた青木得三氏（中央大学経済学部長）の次のような話を引き出している。「ただでさえ、軟弱外交と罵られていた氏のことであり、その事実を決して公にしなかったために、世間には知られていないが、幣原三自身、直接私に対して、「憲法9条は全く自分の発言でマッカーサー元帥に提案したものだ」と語られた。

幣原はさらに、次のように述べている。

「戦争放棄は正義に基づく大道で、日本はこの大旗をかかげて、国際社会の原野を一人進むのである。——原子爆弾の発明は、世の主戦論者に反省を促したが、今後、さらにこれに幾十倍、幾百倍する破壊力ある武器も発明されるであろう。今日のところ世界はなお旧態依然たる武力政策を踏襲しているが、他日新たな兵器の威力により、短時間のうちに、交戦国の大小都市ことごとく灰燼に帰する惨状を見に至らば、その時こそ、諸国ははじめて目

が、最近の研究で、46年1月、後にA級戦犯として終身禁固刑をうけた白鳥敏夫・元駐イタリア大使が、9条の原型となる戦争放棄や軍備撤廃を新憲法の条項に盛り込むべきだとする提案をまとめた書簡を、当時の吉田茂外相を通じて幣原首相に送っていたことが、明らかにされた。<http://www.asahi.com/national/update/0814/OSK200508130084.html>(2005.9/20) なお、憲法9条の幣原発案説については以下参照。

幣原喜重郎 『外交50年』(東京:日本図書センター,1998) pp.237-241 田中英夫『憲法制定過程覚え書』(東京:有斐閣,1979) p.91 塩田潮 『日本憲法をつくった男 幣原喜重郎』(東京:文藝春秋社,1998) 憲法調査会小委員会報告書 『日本国憲法の由来』(東京:時事通信社,1961) p.27

¹⁴ Douglas MacArthur, *Reminiscences* (New York: McGRAW-HILL BOOK COMPANY,1964) p.302-303

覚め、戦争の放棄を真剣に考えるであろう。そのころは、私は、すでに命数を終わって、墓場の中に眠っているであろうが、私は、その墓石の蔭からあとを振り返って、諸国がこの大道につきしたがってくる姿を眺めて喜びとしたい。」¹⁵

1950年5月3日、幣原とともに、マッカーサー元帥を訪問した衆議院事務総長である大池眞氏はその時の様子を次のように語っている。

マッカーサーは、幣原に向かって、「私は、日本進駐まで武力による破壊行為ばかり続けてきたが、これからは、平和の建設に全力を献げるつもりでいたところ、日本國憲法の制定にあたり、貴下が、日本は一切の戦力を放棄すると言われたときにはちょっと驚いた。私は、どうも50年は早すぎはしまいかという気がしたが、しかし、貴下が熱心に主張されるので、この高邁な理想こそ世界に範を示すものと思って、深く敬意を表したが、今日の世界情勢を見ると、やはり少し早すぎたような気がする」¹⁶と言われたという。

実際、確固たる反共主義者であり、ソ連をはじめとする国際共産主義の脅威を認識していたマッカーサーとしては、みずから、すすんでそのような提案をしたとは、考えにくい。この他にも、幣原発案説を証明する文献はいくつかあるが、詳細は筆者の他の論文にゆずることにする。

マッカーサーと日本の復興

ところで、当時の日本人は、マッカーサーをどのように捉えていたのであろうか。1945年、9月2日、マッカーサーは、東京湾沖に停泊する米戦艦ミズリー号の後甲板に立って、日本の降伏調印式を指揮した。日本側からは、天皇の名代である重光外相、そして日本軍を代表する参謀総長梅津美治朗陸軍大将ら計11名の全権団が参加した。この日本代表団の中に、外務省情報部長加瀬俊一がいた。彼は、アマーストとハーバードの両大学で学んだ経歴があり、この日のマッカーサーの言葉を理解できるただ一人の日本人であったという。マッカーサーの演説の一言一句は加瀬の心に刻み込まれた。

「何と心をうつ雄弁であり、何と気高い理想であろう。これがうちのめされた敗敵に対して宣告を下す勝者である。望むなら彼は、一ポンドの肉を取り立てることもできるのである。好むならば、彼は屈辱的刑罰をはたすることもできるのである。しかも、切々として自由と寛容と正義を訴える。最悪の侮辱を覚悟していた私は本当に驚いた。私は、ただただ感動した」¹⁷

この加瀬の感動はその日のうちに、天皇につたえられ、マッカーサーに対する天皇の印象をつくるうえで、極めて大きな影響をあたえたといわれる。こうして、日本の参加者は、今後、日本の実質的支配者になる指導者の演説のなかに、新しい光をみだし、日本再生への希望をいだいたのである。

ところで、マッカーサーの日本統治にあたって、もっとも難しい問題は、天皇の処遇問題であった。当時連合国の中には、天皇を戦争犯罪人として処罰すべきという意見が、根強くあった。天皇制に比較的寛大であるアメリカにおいても、世論は、天皇の戦争責任を追及し、処罰すべきとの意見が大勢を占めていた。米国の世論調査社「ギャラップ」によれば、米国民の77%が、天皇の処罰を要求していた。

マッカーサーは、そのような中で、天皇制に対しては、比較的寛容な考えをもっていた。しかしながら、まだあったこともない相手だけに天皇をどう扱うべきか決めてはいなかった。

¹⁵ この証言は、幣原が戦争放棄について公式に発言したもので、1946年3月30日枢密院の非公式会合の席上での話である。宇治田直義 「幣原喜重朗」(東京：時事通信社 1958) p.228

¹⁶ 宇治田直義 「幣原喜重朗」(東京：時事通信社 1958) pp.223-224

¹⁷ 加瀬俊一 「ミズリー号への道程」(東京：文芸春秋社 1950)

日本における天皇制の問題が、日本統治上でも重要であり、そして、連合諸国の関心が高い問題だけに、アメリカ政府としては、はやく、天皇を喚問するようマッカーサーに求めた。しかしながら、マッカーサーはなかなか応じなかった。彼は、いかに戦争に勝ったとはいえ、敗者を呼びつけるような形で、会談をもつことは、日本の武士道の精神に反するとして、天皇からの申し出を待ったのである。こうして、天皇のほうから、申し出があり、1945年9月27日、歴史的会談が設定された。この会談の詳細については、まだ、すべてが公開されたわけではないが、幸い、アメリカの通訳者がその会談の様態を証言した内容がある。

それによれば、「元帥は平価の所に力強く歩み寄り“ようこそおいでくださいました。”両手で陛下の手を包むようにして握手し、陛下は震える手で、握手をうけられゆっくり深くおじぎをしたという。元帥は、陛下が命乞いにきたものと思ったが、陛下のお申し出は、意外にも、自分が「身代わり」になりたいというものであった。自分は、どうなってもいいが、天皇の名のもとに戦った人々を救ってほしい。」¹⁸これに対し、元帥は非常におどろき、日本の将来に陛下は欠かせないと確信したという。

実際、マッカーサー自身も、回想録のなかで、この会談を振り返り次のように、記述している。「国民が戦争遂行にあたって、政治、軍事、両面で行ったすべての決定と行動に対して、全責任が自分にある」という発言に、「私は骨の髄まで揺り動かされた」¹⁹

いずれにしても、この会談を契機に、マッカーサーは、天皇は日本にとってなくてはならない存在であると確信し、翌年、1月25日、長い電報をワシントンにおくり、天皇制の存続を訴えたのである。

一方、天皇もマッカーサーの人格に感化され、その後の、マッカーサーの日本統治に全面的に協力していくことになる。他国による占領統治というものが、いかにむずかしいものであるか、今日イラクの情勢をみてもわかる。圧倒的軍事力でイラクを制圧したアメリカが、いまは、逃げるようにして、イラクをさらなければならないほど、イラク統治は、混乱をまねいた。しかるに、米軍の占領の中で、700万の軍隊が武器を棄て、一発の銃声もうたれることなく、一滴の流血をも見ないでおこなわれたことは、歴史に比類ないことである。これも、一つには、この会談の成功に起因しているといえよう。

次にマッカーサーの日本統治についてみる。マッカーサーは、確かに軍人であるが、彼は、もうひとつ、ミッシヨナリー(宣教師)としての一面を強く持った人物であった。彼は、精神的支柱を失った日本こそキリスト教を布教する上での最高のチャンスであるとして、そのためのあらゆる支援を惜しまなかった。彼は、民主主義の定着のためには、キリスト教が不可欠であるとの信念をもっていった。²⁰当初ほとんどいなかった、宣教師を、年毎に、倍増させ、1951年までに、2500名の宣教師を受け入れたのである。彼らは、米軍軍用機で運ばれ、入国後は、米軍専用の列車、宿舎などあらゆる便宜があたえられた。また、彼は、聖書の普及にも力を注ぎ、戦前には、年平均14万5千部だった日本での聖書配布数を一千万部に増やすよう要請した。

一千万部の聖書は軍の輸送船で日本に運ばれ、国内のポケット判 聖書連盟の協力で日本中に配布したのである。

また、当時世界の最大の脅威であった共産主義から日本をまもるため、理論的な砦として国際基督教大学の設立に尽力した。さらに、日本をキリスト教化するうえで、一番大きな役割をはたすとおもわれたのが、皇室の存在である。この皇室にキリスト教を布教するためにさまざまな努力が傾注された。当時、日本でもっとも有名なキリスト教徒である賀川豊彦は、宮中で、天皇に、キリスト教の講義をした。また、皇后も、聖書を受け取り、毎週、皇室において、聖書研究会を催し、3ヶ月に一回は、天皇も参加した。皇室の一員である高松

¹⁸ <http://www.youtube.com/watch?v=inE1DSH0jrk> (検索日 2010.7.14)

¹⁹ Douglas MacArthur, Reminiscences (New York: McGRAW-HILL BOOK COMPANY,1964) p.288

²⁰ 袖井林二郎「マッカーサーの二千年」(東京:中央公論社 1985) P.218

宮は、国際基督教大学の設立に際し、「クリスチャンが日本の光となることを切にねがってやみません」と挨拶をした。²¹

また、天皇は1946年に来日した米国教育施設団長ストッダード博士と会った際、側近のものには、何も相談もなく直接に皇太子、今の明人天皇の家庭教師にアメリカの女性でクリスチャンを要請したほどであった。

ところで、キリスト教を普及させたいマッカーサーを非常に喜ばせたのは、1947年にキリスト教的人権思想をもっていた片山哲が首相になったことである。この日マッカーサーはとくに声明を發して、片山内閣出現を次のようにたたえた。「片山氏が日本の首相として出てきたことの政治的意味に劣らず、重要な点は精神的な意義である。歴史上、実にはじめて日本は、キリスト教徒たる全生涯を通じ、長老教会派の教徒としてすごした指導者によって指導される。それはとりもなおさず完全な宗教的寛容がいまや日本人の精神を支配し、そして完全な信仰の自由が日本にあることを反映する」さらにマッカーサーは、この日本初のクリスチャン首相出現の国際的意義を高らかにうたう。——それは、東洋の三大国が、いずれも政府の首班にキリスト教の信仰者、中国では蒋介石、フィリピンでは、マニユエル・ロハス、日本では片山哲を持つにいたったことである。これは、キリスト教の神聖な觀念の確実な前進を意味し、洋の東西を問わず、人類は精神的に共鳴するものを見出しうるとの確信をはっきりと深めさせる」²²

こうして、日本では、首相をはじめ、最高裁長官である田中耕太郎、東大総長南原繁、文部大臣、前田多門など、マッカーサーの統治下で、クリスチャンにより、国の中枢が占められました。

このように、キリスト教は、マッカーサーの全幅の支持によって、「占領軍の宗教」とさえみなされ、他の宗教に比べて圧倒的に有利な立場におかれたが、ついには、日本人のこころをとらえることができなかつた。絶対権力をもった指導者が、全面的に一つの宗教をひろめようとしたにもかかわらず、結果的にキリスト教が日本では、わずか、全人口の1%程度しかならなかつたのは、まさに、今後研究すべき課題といえよう。²³

マッカーサーの日本統治の功績

マッカーサーの占領統治の功績についてのべると、まず、民主主義の普及をあげることができる。戦前の日本には、国民主権がなく、天皇主権であった。それが、マッカーサーにより、現行憲法が施行されたことにより、天皇は、象徴となり、国民主権が認められ、言論思想の自由が確保された。とりわけ、女性の地位は著しく上昇した。

また、敗戦により、荒野と化した、日本で、人々が飢餓苦しんでいるとき、マッカーサーは、本国に多大な食糧支援を要請し米国が日本に食物を送らなければ自分は辞任する以外ないと直接トルーマン大統領に訴えた。それにより、多くの日本人が飢えからすくわれた。当時、マッカーサーは、日本にとってもっとも重大なる問題が食料問題であると認識していた。そして、永続的な食料確保のためには、肥料の生産が不可欠であるが、戦争の後遺症で肥料の生産ができないため、マッカーサーは、米国政府に20の軍需工場を肥料工場に切り替え、その生産品を全部日本に振り向けることを要求し、その承認をえたのであった。²⁴ こうして、深刻な食糧危機から日本を救ったのである。また、北海道進駐を要求するソ連に対

²¹ Ray Moore, “皇室のキリスト教化を策したマッカーサー 諸君8月号（東京：文芸春秋社,1981） p.231

²² 袖井林二郎 前掲 pp.217-218

²³ この問題について、いろいろの分析があるがその一つに、古谷安雄「なぜ日本にキリスト教はひろまらないのか」東京：教文館 2009. が参考になる。

²⁴ 長沼節夫 ‘初公開された「天皇—マッカーサー」第三回会見の全容」「朝日ジャーナル」3.3号（東京：朝日新聞社,1989） P.28

し、毅然として、それを拒否し、日本が分断国家になる道を防いだ。このソ連とのやり取りについて、マッカーサーは、次のように記している。

「ソ連は占領当初から問題を起こしはじめた。ソ連軍に北海道を占領させて、結局日本を二つに分けるという要求を持ち出したのだ。ソ連軍は最高司令官の指揮下におかず、最高司令官の権限から完全に切り離すべきだといいはじめた。私は、真正面からそれを拒否したが、デレビヤンコ将軍は、ののしらんばかりの調子で、ソ連はかならず私を最高司令官の職から罷免させて見せるとおどし、私が承知しようがすまいが、ソ連軍は、とにかく日本に進駐するとまで極言した。そこで私は、もしソ連兵が一兵たりとも、私の許可なく日本にはいったら、デレビヤンコ将軍自身も含めてソ連代表部の全員を即座に投獄するといっぺやっした。」²⁵

こうして、マッカーサーの毅然とした態度に、ソ連は北海道占領を放棄せざるをえなかったのである。

マッカーサーは、日本の右翼からは、日本の伝統文化を破壊し、9条のような国の主権を無視する条項を成立させた張本人として、非難され、また、左翼からは、アメリカ帝国主義の手先として、これまた、非難されてきた。しかしながら、命をかけて戦った敵国でありながら、その国の文化と伝統を尊重し、全力で国民を飢餓より、救い出し、民主化と平和国家の構築のため努力した彼の姿は、当時の人々に深い感銘と感謝をいだかせたことは、事実である。²⁶ マッカーサーが在任した1945年から、7年間、日本人が、なんと50万通以上の手紙を彼に送っているのである。もちろん、すべてが、肯定的に評価する手紙ではなく、占領政策を批判するものもあったが、それは数の上では、圧倒的に少数である。彼が、解任されて、米国に帰国するとき、20万名にもものぼる日本人が早朝6時に、自発的に街路にでて、彼を見送ったのである。²⁷

文鮮明先生は、マッカーサーに対し、「どうして我々は、映画「仁川」にこれだけの努力を注いだのでしょうか。結果がどうであれ、動機は人々にマッカーサーを理解してもらうことでした。マッカーサーがどれほど神様を愛し、人民を愛したかを先生は示したかったです。マッカーサーは第二次大戦後、日本へやってきてその国を復興させました。彼は本当に人々を愛し尊敬したのです。また彼は神様をととも愛し、専制主義と共産主義に対して猛烈に闘いました。先生はこの点を人々にも分かってもらいたかったです。」²⁸

幣原喜重郎と憲法9条

つぎに、もう一方の当事者である幣原喜重郎についてみてみよう。幣原喜重郎は、1872年（明治5年）、大阪の大地主の次男として生まれた。父親の新治郎はすこぶる教育熱心で、子供のためなら財産の売却もいとわない人物であった。幣原は1883年、英語教育で名高い大阪中学校に入学、やがて、三高を卒業し、1892年、東京帝国大学法学科に進学し、1895年7月に卒業している。なお三高以来の同期生からはその後、多くの人材が輩出したが、幣原が後に外務大臣として支えた浜口雄幸首相もその一人であった。当時、

²⁵ マッカーサー回想記<下> 訳 津島一夫（朝日新聞社,1964）pp.135-136

²⁶ マッカーサーの解任にあたって、朝日新聞は次のようにのべている。

「日本国民が敗戦という未だかつてない事態に直面し、虚脱状態に陥ったとき、われわれに民主主義、平和主義のよさを教え、日本国民をこの明るい道へ親切に導いてくれたのはマ元帥であった。子供の成長を喜ぶように、昨日までの敵であった日本国民が、一步一步民主主義への道を踏みしめていく姿を喜び、これを激励し続けてくれたのもマ元帥であった。」

朝日新聞 1951年4月12日 社説

²⁷ 袖井 林二郎 「拝啓マッカーサー元帥様—占領下の日本人の手紙(岩波現代文庫) p.5

²⁸ み旨と海 オーシャンチャーチとアメリカ 2007年7月23日

東京大学の法科卒業生の就職には、引く手あまたであったが、彼は、日清戦争や三国干渉などの難局に直面した日本の国運を打開することこそが自分の使命であると確信し外交官の道を志すことになった。

1924年、幣原は加藤高明憲政会総裁を首班とする護憲三派内閣の外務大臣に就任したのである。以後、1927年4月に退陣する第一次若槻礼次郎内閣までの2年10ヶ月と、1929年7月成立の浜口雄幸民政党内閣から、1931年12月退陣の第二次若槻内閣までの2年5ヶ月の、あわせて5年3ヶ月の長い間、日本外交の舵取りを担うことになったのである。世にいう‘幣原外交’である。この幣原外交は、国際協調主義、経済重点の外交、中国に対する内政不干渉主義をもって知られている。入江昭は、幣原によって代表される日本外交の意義を「軍事的・経済的・さらには思想的に乱れた日本の対外態度に統一性を回復し、新しい国際観念をもって世界の諸問題に対処していこうとしたこと」に見出している。²⁹また、幣原外交と田中外交を比較した馬場伸也は、「幣原には‘日本が日本が’といったような独善的な考え方はなかった。つねに、日本を世界の中に置いて見極め、あるいは日本を外から――世界的見地から――眺めていた」と表現している。³⁰もっとも、このことは、幣原が国益を軽視したということではない。満蒙權益を含む日本の国益に対しては毅然としてこれを擁護する姿勢をとった。その最もよい例は、北京特別関税会議（1925－1926）に際しての幣原の方針である。通説によれば、この会議は中国のナショナリズムに対する日本の同情を示し、中国朝野の対日感情を一変させた歴史的なものであるということになっているが、入江によれば、事実は反対で、「中国や列国の反対を押し切ってまでも、徹頭徹尾日本の利益を守り抜く態度が日本の政策を支配していた」という。

こうした幣原の態度をもって、入江は幣原外交を「現実主義」の極端な現れであったと指摘した。だが、国益を外交の主要目的にすることは、世界いずれの国においても同じことであり、幣原の場合も例外ではないが、問題は、如何にすることが、国益になるかという問題である。

幣原は、一国の独善的な外交ではなく、他国を尊重し、ともに協調しながら、平和を実現していくことこそ、真の意味の国益だと考えたのである。

だが、幣原外交の指導原理は、力を優先する軍部とのあいだに、激しい軋轢をひきおこし、みぞも次第に深まっていった。

どちらかという、経済を重視する彼の経済主義に対し軍部は不満であり、彼らは、国防を外交の根本にすべきとの観念を固執していた。さらに、日本の国土が狭く、自然資源に不足していることなどから、このような小国から、大国への道を歩むことが、日本のゆくべき道であると主張した。そして、これに対応できない幣原外交への批判を強め、幣原は、「軟弱外交」「売国外交」とまで、あらゆる罵詈雑言をあびせられた。そして、政界から追放されることになるのである。外務省を去って後は、政治の表舞台から引退し、もはや、誰からも注目を受けることはなかった。しかるに、ポツダム宣言の受諾により、日本の敗戦が決定され連合軍の進駐という事態のなかであって、この難局において国を指導するものは幣原しかいないと白羽の矢があったたのである。彼は、余生を鎌倉で静かに送ろうと引越しをしている最中に、突如、天皇陛下より呼ばれ、高齢にもかかわらず、最後の御奉公として首相の任を受けたのである。³¹

ところで、憲法制定過程において問題になるのは、それでは、幣原は、過去の反省と、彼の平和主義者としての側面からのみ、マッカーサーに戦争放棄条項を提案したのかという問題である。否である。すでに、見たように、幣原という人物は、戦前、長きにわたって、外務大臣をつとめ、国内では評判が悪かったとはいえ、「幣原外交」という名前さえつけて、呼ばれるベテラン外交官であった。既に見たように、ある学者は幣原外交をして、現実主義

²⁹ 入江昭、「日本の外交」（東京：中央公論社、1993）p.86

³⁰ 馬場伸也、「満洲事変への道― 幣原外交と田中外交―」（東京：中央公論社 1972）

³¹ 塩田潮 「最後の御奉公―宰相 幣原喜重郎」 文藝春秋 1992

外交とさえ位置づけているくらいである。その彼がなぜ、あのような理想主義的な憲法を提案したのであろうか。

憲法9条の発案をめぐっては、戦後最大のミステリーといわれる所以があるのである。左翼系の学者のなかには、幣原の平和主義者としての側面、理想主義的側面からのみみて、これを幣原の発案であると主張したのである。しかし、歴史の中に、あらわれた幣原は、既に見たように、決して、単なる理想主義者ではないのである。では、その現実を誰よりもよく知る幣原がなぜ、あのような非現実的といわれる憲法9条を提唱したのであろうか。

それは、ポツダム宣言を受諾した時点から、日本の政治指導者たちの最大の関心事であった、国体の維持、すなわち天皇制の存続問題であった。

もし、この天皇制が崩れることになれば、日本国内の統治は、修羅場となる。各地でゲリラが横行し、戦後復興どころでなくなってしまう。首相としての幣原にとって、天皇制の維持こそ最優先事項であったのである。ところが、天皇制をとりまく国際環境ははるかに厳しいものであった。

1945年12月27日、モスクワでひらかれたアメリカ、イギリス、ソ連の三国外相会議で、対日占領政策に関する連合国の諮問機関である極東諮問委員会が改組され、占領政策決定機関として強力な権限をもつ、極東委員会が設置されることになった。中国を加えた4大国のほかに、フランス、オランダ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インド、フィリッピン、7カ国が、加わり、日本管理に関する政策、原則、基準を決定し、連合国軍最高司令官の行動や指令を検討する権限が付与された。この構成国のうち、ソ連やオーストラリア、ニュージーランドのように、天皇制の廃止を主張する国もあり、オーストラリアとニュージーランドは、1946年1月18日、総司令部に裕仁（ひろひと）天皇を含む戦争犯罪人名簿を提出した。特に、ソ連は、天皇制廃止の立場をとり、極東委員会、あるいは、対日理事会において、マッカーサーのソフトな対日政策を常に批判してきた。³² オーストラリアは、政府も与論も、国家の元首にして、軍部の大元帥として、天皇は、日本の侵略行為と戦争犯罪に対して、責任を負うべきだと主張していた。

この天皇制に対しては、アメリカ国民の動向も決して、好意的ではなかった。1945年、ヴァージニアのホット・スプリングで三日間の会議を持った太平洋関係研究所（The Institute of Pacific Relations）は、「戦後日本の取り扱い」に関する合意を公表したが、その6項目の合意点の第一が天皇制であった。この第一項目は次のように表現されている。

「天皇制は廃止されるべきである。しかしながら、裕仁、あるいは、彼の後継者が停戦協定に署名し、そのことによって天皇と不名誉をうけた日本の軍閥とのつながりを明らかにした後、天皇制は廃止されるべきである。」³³

また、アメリカの新聞論調にあらわれた世論をみると、「シカゴ・ニュース」の論説は、「日本の天皇制が日本から根こそぎに除去されるまで、日本人を文明人の仲間とすることは不可能である。」³⁴ といい、ニューヨーク・ヘラルド・トリビューンは、「あの中世期的ミカド・システム（天皇制）が温存されている限り、太平洋には平和は決してありえない」³⁵と指摘した。また、ワシントンポストの報じるギャラップ世論調査によると、天皇の取り扱いについてアメリカの世論は次のような意見を示している。³⁶

処刑	33%
裁判で決定	17%
終身刑	11%
追放	9%

³² 武田清子、「天皇観の相剋」,(東京:岩波書店,2001) p.343

³³ New York Times 1945.1.12

³⁴ Chicago News 1944.1.31

³⁵ New York Tribune 1944.2.20

³⁶ Washington Post 1945.6.29

その他さらに、1945年、9月25日、米国議会は「天皇ヒロヒトを戦犯として裁判にかけるのが合衆国の方針」とする両院合同決議を可決したのであった。とくに、幣原内閣の危機感をつのらせたのは、1945年の12月、皇室と関係のある近衛文麿と天皇の側近である木戸に逮捕状がでたことであつた。³⁷ もはや、一刻の猶予もない緊迫したものであつた。

日本は、戦争を天皇の名で行つた。天皇制の存続が日本軍国主義再興に結びつく危険性を国際社会は感じていたのである。将来再び、日本が天皇の名において戦争をしかけてくるのではないかという、きわめて、厳しい疑念が国際社会の中にあつた。このような中、極東委員会が、2月26日から、活動を開始することになつたのである。とすれば、天皇制廃止問題や天皇の戦争犯罪問題がまた浮上するかもしれない。内閣総理大臣の幣原としては、最大喫緊の課題であつたのである。また、極東委員会の干渉を嫌うマッカーサーとしても、極東委員会の発足する2月26日までに、新憲法発表のタイムリミットと考えたのである。³⁸ このような中で、幣原は天皇制を残すためには、国際社会にむけて、反省と贖罪の意味でも、二度と戦争をおこさないという強固なる平和のメッセージが必要だと考えたのである。その手始めとして、1946（昭和21）年1月1日、天皇が「新日本建設に関する詔書」（年頭の詔書）によって、自らの神格性を否定したのである。これが、いわゆる「天皇の人間宣言」であつた。その内容は、「私は国民と共にあり、その関係は、お互いの信頼と敬意とで結ばれているもので、単なる神話や伝説に基づくものではない。私を神と考え、また、日本国民をもって他の民族に優越している民族と考え、世界を支配する運命を有するといった架空の観念に基づくものではない…」というものであり、大日本帝国憲法3条の「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」を否定したものであつた。この案文は、幣原首相が英文で起草、藤田侍従長が詔書の形式に整えたものである。もっとも、これは、いわゆる建前であつて、実際の、人間宣言の起草は、他のところでなされたのであるが、そのことについては、ここでは述べない。しかし、いずれの形にせよ、幣原が、関与したことに間違いない。ここでの真の狙いは、先に見た、当時彷徨として上がりつつあつた海外からの天皇の戦争責任追求をかわすところにあつた。そして、さらにそれを強固にするためにもたれたのが、1月24日の幣原・マッカーサー会談であつたのである。

したがって、幣原にとって、この会談での最重要課題は、天皇制維持の問題であつたのであり、それを確保するための戦争放棄条項であつたのである。一方、マッカーサーにしても、米国内における天皇制を廃止すべきだとの強力な意見も出ていることを承知しながらも、天皇制をできれば維持したいと考えていた。幣原は、こうして、天皇制の維持という悲願達成の目途をつけた後で、戦争放棄の理想論をかたつたのである。このことは、何を意味するかというと、幣原にとって、最優先課題は、戦争放棄という平和思想の実現にあつたのではなく、天皇制の維持という国益であつたのである。事実、この会談の翌日、マッカーサーは、米国政府に天皇制維持の決定を長い電文で送っている。³⁹

だが、このことは、幣原が、戦争放棄を天皇制の維持のための単なる方便として使つたというのではない。すでに述べたように、平和主義は幣原の長く抱き続けた政治思想であつた。しかし、政治思想を振りかざしながら、憲法9条を実現させたわけではない。どちらかというところ、現実的状況と彼の理想主義が、戦後日本の状況のなかで、見事に、一致したところに成立したのである。戦争放棄、交戦権の否認という世界史上、類例のない条文が、日本国憲法9条として出現したのである。

もちろん、この9条についていえば、幣原だけでできたものではない。マッカーサーとの思想的一致、現実認識の一致があつてできたことである。その意味で、憲法9条はマッカーサーとの合作であるということができよう。

³⁷ Washington Post 1945.12.7

³⁸ 鈴木昭典「日本国憲法を生んだ密室の9日間」（東京：創元社1995）p.166

³⁹ 鈴木昭典「日本国憲法を生んだ密室の9日間」（東京：創元社1995）p.177

以上見たように、日本国憲法9条の思想的背景は、幣原の現実認識と平和思想とキリスト教精神をもったマッカーサーとが意気投合して完成したものといえるのである。草案の段階で日本の近代のキリスト教思想をもった植木枝盛を参考にし、キリスト教思想を理解した幣原とその布教を天職と考えたマッカーサーの、「剣をとるものは、剣にて滅びる」（マタイ26：52）というキリスト教的背景をもって、成立したものだといっても過言ではないであろう。マッカーサーは、自分の軍人としての生涯は失敗だったかもしれないが、私の救いは、日本国憲法を発表できることであると言ったという。⁴⁰ また、内村とともに、日本を代表するキリスト教徒である賀川豊彦は、キリスト教の背景をもった憲法9条を積極的に擁護するとともに、世界連邦を提唱し活発に運動を展開したのである。

頭翼思想からみた日本の平和思想の意義とその限界

明治維新以後の日本近代史は、ひたすら大国への路線を歩み、日清、日露、第一次大戦、日中戦争、第二次大戦と、戦争につぐ戦争をくりかえした大国主義の歴史であった。その大国主義の時代にあって、伏流として存在した平和主義が日本の敗戦後日本国憲法として結実したのである。そして、日本国憲法は制定者の思想的背景からしても、既にのべたように、キリスト教思想が鮮明である。換言すれば、明治憲法が天皇を絶対的存在として、機軸として、位置づけたのに対し、キリスト教の神を機軸としているといってもいいだろう。神主義を標榜する頭翼思想の観点から見れば、この点は、極めて重要である。また、聖書にあるように、剣をとるものは、剣にて滅びるとあるように、頭翼思想に基づく理想社会も、武力でなく愛を中心とする世界である点からも評価しうる。

実際、日本国憲法成立後、60年以上たつ今日、日本は一度も戦争にまきこまれることのなかった事実を考慮するとき、明治憲法の下で、わずか、50年の間に、5度も戦争に巻き込まれた点を考慮するとき、その思想的意義と実際に果たしてきた役割は過小評価してはならないだろう。

だが、このように平和憲法に結実した日本の平和思想も頭翼思想の観点からみるといくつかの限界点も指摘できる。まず、人間の体は、心と体から成り立っており、心を見捨てた体がないように、体を見捨てた心もない。そのように、理想と現実においても理想を見捨てた現実がないように、現実を見捨てた理想もありえない。内村らの主張した小国平和主義の場合、過度に理想を追求するあまり、国際政治における力の現実をあまりにも軽視する傾向があり、これもまた、理念としては、限界がある。また、人間社会をあまりに、性善説的にとらえるのも、現実を知らない楽観的主張との非難を免れることができない。理想主義者が、今日まで共産主義の戦略に容易に乗ずる隙をあたえてきたのもこのためである。かつて、ラインホルトニーバーは、「自分の意志や自分の利益以上の律法を認めない道徳的嘲笑主義者を、聖書の呼び名で「この世の子ら」または、「闇の子」と名づけ、私的利益をより高い律

⁴⁰ ケン・ジョセフ シニア&ジュニア 「隠された聖書の国・日本」 徳間書店 2008.p.329

法のもとに従わせねばならないと信ずる人々を「光の子」と名づけた。⁴¹残念ながら、今日までの歴史を見る限り、聖書にあるように、「この世の子らは、その時代に対しては、光の子らよりも利口である」（ルカによる福音書16章8節）という。

確かに、現実主義者の主張のように、現実にはホッブスの言う「万人の万人に対する戦い」である面を軽視してはならない。とりわけ、国際政治は、無政府状態であり、なおさらである。

内村鑑三は、自分が外務大臣になれたとすれば、まず、内閣において、軍備全廃を議決し、露国政府にその非紳士の行為を忠告する。最初は、聞く耳をもたないロシアといえども、日本国駐在の公使が日本において、実際、軍備全廃されたとの報告や、世界各国の新聞、マスコミが筆をきわめて、日本の行動を称賛するのを見て、ロシアもその行為を反省し、改めるであろうとのべている。⁴²

だが、現実の国際政治を知る者は、このように楽観的に世界を見つめることはできない。力の弱い者は、強いものに蹂躪されてきた弱肉強食の歴史を知るとき、力の要素を軽視することは、致命的である。とりわけ、第二次世界大戦後、アメリカを筆頭とする自由民主主義の陣営とソ連を筆頭とする共産主義陣営の熾烈な戦いは、力のないものは、領土を奪われるという国際政治の冷厳なる現実を示していた。共産主義がマルクス・レーニン主義による膨張を続けたのに対し、民主主義陣営は守勢に立たされた。そのような中、文鮮明先生は、共産主義を神を否定する宗教と位置づけこれに果敢に立ち向かうことを訴えたのである。

「共産主義がこの地球上で完全に勝利するということは、神がこの地球上から完全に追放されるということであり、これは民主主義または自由主義の敗北である以前に、神の敗北を意味することです。それゆえに、共産主義は人類の恩讐である以前に神の恩讐となるのであります。」⁴³

そして、この共産主義の克服のために次のことが必要であると訴えたのである。

「武力にのみ頼ってはいは共産主義に決して勝つことはできません。人間の固い信念は武力、または原子爆弾では到底打ち壊すことができないからであります。偽りに勝つ力は、真なる真理と信念と思想であります。」⁴⁴

このように、共産主義との対決を強調する勝共思想は、「汝の敵を愛せよ」という心情倫理に立脚するキリスト教をはじめとする平和主義者、左翼から、極右翼として、つよい反発を招くに至った。しかしながら、心情倫理だけでは、共産主義の膨張を阻止することはできない。共産主義との思想闘争、武力闘争のうえに、はじめてソ連の崩壊があり、自由民主主義体制は守られたのである。従って、責任倫理にしたがって、自由民主主義体制を守るべく主張し行動した世界的勝共運動は頭翼思想に基づくもので高く評価されねばならない。しかしながら、ここで注意すべきは、頭翼思想の観点から言えば、責任倫理も重要であるが、

⁴¹ Reinhold Niebuhr, *The Children of Light and The Children of Darkness*, New York: Charles Scribner's Sons, 1944 p.9-10

⁴² 内村鑑三 近時雑感 Meiji 36.9.30 (<http://green.ap.teacup.com/lifework/536.html>)

⁴³ 文鮮明 「救国世界大会」 演説文より 1975.6.7

⁴⁴ 同上

心情倫理も極めて重要であるということである。心と体、性相と形状という観点から見れば、性相の部分にあたるのが心情倫理である。それ故に、共産主義ソ連の崩壊が、決まるや、文先生は、共産圏の人々を救済する方策に舵を切ったのである。ソ連のゴルバチョフとの会談、北朝鮮の金日成との会談などは、思想としての共産主義は、間違っているから、戦わなければならないが、共産圏の人々は、救わなくてはならないという観点からでたものである。ここに、勝共運動の本質がある。すなわち、頭翼思想の観点からいえば、敵を憎み、倒すことが目的ではなく、最終的にはあくまでも愛をもって敵をも救うことにあるからである。だが、この観点がわからないものにとっては、思想的変節、右翼から左翼への転向とみなすであろう。

日本のキリスト教をはじめとする平和主義者たちが、非戦論を唱え、武力によらない平和のため、その保障としての世界政府、世界連邦などの構想を積極的に推し進めてきたことは、評価しなければならない。だが、そのような平和論が過去に共産主義につける隙をあたえ、かえって、国を窮状に招いたことも事実である。他方、責任倫理に基づく、現実主義論は、現実基礎をおく面、説得力があり、無難の選択のようにみえるが、現実という名のもとに、自国中心、自国の国益のみを主張する方向性に行くとするならば、他国との深刻な摩擦を誘発し、国の進路をあやまらせかねないのである。

戦後、日本の針路を決めるにあたって、大きな影響力を行使した吉田茂首相は 1951 年、講和条約を目前にして、日本がなぜ、あのような無謀な戦争をはじめてしまったのかを若手外交官に命じて研究させた。その秘密報告書「日本外交の過誤」が、50 年以上にわたって、秘密のままにされていたのが、2003 年 4 月をはじめて公開された。その文書を分析した小倉教授は次のように述べている。

「現実的対応という合言葉のうちに、理念と理想が失われるようなことがあれば、実はそれこそ、第 2 次大戦前の外交の誤りを繰り返すことになりかねない。——それしか現実には選択肢はないのだ——この言葉は、感情に走らず、冷静な計算と戦略によって物事をきめるべきことを諭す上では、最上の殺し文句である。しかし、この殺し文句こそ、日本を日米開戦に追いやり、あの戦争の悲劇を引き起こした時に、最も使われた文句であったことも忘れてはなるまい。」冷静に現実をみるのも大切であるが、かといって、現実に偏しすぎて、理念と理想を失うのがもっとも問題であると指摘したのである。⁴⁵

結論

戦後、60 年以上にわたって、一度も改定されることのなかった、日本国憲法の改定が現実的課題となってきた。もちろん、憲法も時代の産物である故に、時代の流れに沿って、改正せざるをえない場合もあって当然である。しかしながら、憲法思想史の観点から見れば、個々の条項の変更以上に、重要なものは、その憲法の基底に流れる憲法思想である戦後 60 年、日本が急速な戦後復興と経済発展をなす中で、さまざまな葛藤がありながら、隣諸国との平和を維持してこられたのは、軍事的には日米安保条約によるところが、多く、思想

⁴⁵ 小倉和夫 「吉田茂の自問一敗戦、そして報告書「日本外交の過誤」(東京：藤原書店 2004) p 20-21

面では、国の根幹である憲法において、マッカーサーと幣原を中心とするキリスト教精神を背景とした普遍的平和思想が主張されてきたことによると見ることができる。久保木修己会長は、「日本にキリスト教が伝えられてすでに400年以上の期間を経ているが、それでもなおキリスト教アレルギーというものをぬぐうことができなかった。それについて幾つかの原因をあげることができるが、やはり皇室を中心とした民族的、国家的伝統に関わる問題を考えざるを得ない。しかし、日本民族がキリスト教の奥義を知り、日本の伝統的国家体制の由来を理解していくならば、おのずとキリスト教アレルギーは解消され、真のキリスト教が受容されていくようになると思う。」と述べ、日本における頭翼思想の必要性を強調した。⁴⁶

また、頭翼思想の主唱者である文鮮明先生は、日本の第二次大戦後の摂理的使命について次のように述べています。「日本の現在のような復興は、神様を通したユダヤ・キリスト教摂理に関連して説明されるしかないのです。もし、日本が神様の摂理的計画において一つの役割を担っているなら、私たちは、日本が神様の摂理的責任について耳を傾けなければなりません。その理由は、神様の摂理の目的が世界平和の実現であり、世界平和は、すべての人類の希望であるからです。すべての島嶼国家が平和世界創造のための「島嶼国家連合」として、一緒に集まって、互いに寄与するならば、人類歴史においてこの上ない、希望を提供することでしょう。—— 私は、全世界の島嶼国家が日本に与えられた天運を相続し、世界平和追求のための彼らの集団的な努力の傾注によって、世界平和は実現できると確信しています。」⁴⁷

近年、アジア共同体、とりわけ東アジア共同体が政治家のみならず、学者、民間人のなかから主張せられている。それは、まさに時代の流れといっても過言ではない。だが、中嶋嶺雄教授によれば、「東アジアの現実を地政学的にとらえれば、大陸国家・中国の大陸性(continentality)、半島国家・韓国の半島性(peninsularity)、そして海洋国家・日本の島嶼性(insularity)がせめぎあっているということができよう。」⁴⁸ と述べている。今日、大陸を主導とする東アジア共同体は、体制の違いなどもろもろの状況を考慮すると時期尚早である。むしろ日本は、海洋国家としての特色を生かした島嶼国家連合をとおした共同体を模索すべきではなかろうか。そして、長期的には、国際ハイウェイを通したアジア共同体の実現に向けていかなければならない。

文鮮明先生は、国際ハイウェイを提唱されながら、アジア共同体の必要性を次のように強調された。

「中国大陸から韓半島を縦断し、トンネルあるいは鉄橋で日本列島を連結して日本を縦断する一大国際ハイウェイで、ここでは自由が保障されるのです。もしこれが建設されるなら、アジア諸国はハイウェイで連結され、一体化することができます。そうなれば、経済や文化の交流が頻繁となり、アジア共同体が形成されるのです。」⁴⁹

この共同体を形成するためには、何よりも相互の信頼基盤造成が不可欠であり、その基底に普遍的価値観を有する頭翼思想が貢献できるであろう。

⁴⁶ 久保木修己「久保木修己講演集」 光言社 1988. P.159

⁴⁷ 文鮮明 「環太平洋摂理」 光言社 2004. p.220

⁴⁸ 中嶋嶺雄 「知恵蔵 2013」 解説

⁴⁹ 文鮮明 「第10回科学の統一に関する国際会議」における演説 1981.11.10

かって、内村鑑三は、第一次代戦後の1926年、日清、日露戦争、そして第一次世界大戦において戦勝国になった日本の歴史をふりかえって、次のように書いている。

「日本が最初にヨーロッパから学んだものが陸軍と海軍であったということは、まことに嘆かわしいことである。なるほど日本は西洋式の戦闘方法の採用によって、一世紀もたたないうちに世界の列強に伍する地歩を占めた。だが、失ったのは何であったか。40年前、日本は世界で最も愛される国であった。——しかし今は、何という違いだろう。！ 三回立て続けの戦勝によって、日本は台湾と朝鮮と南洋群島を得た。しかし、それとともに全世界の愛を失った。いまや全世界は日本に向かって閉じ、日本の国民はいたるところで、恐れられ嫌われている。」⁵⁰

内村がこのように書いてからほぼ20年後に、日本は世界に向けて内村の言葉にそったような戦争放棄・戦力不保持の武装解除を国民的宣言として発した。むろん、すでに述べてように、この限界も明らかであるが、キリスト教的普遍的価値観をもってつくられた、日本国憲法のもとでの日本の国柄は、日本人が想像する以上、世界が評価し、愛していることも事実である。⁵¹そのことは、東日本大震災でしめされた世界中からの暖かい支援をみてもわかるであろう。

人類の平和という長期的視野とグローバルな視点からみるなら、日本は神主義を基調とした頭翼思想に基づくアジア共同体、世界共同体の方向に向かわなくてはならないだろう。いまこそ、光の子らは、幼子のような純真さと、蛇のような狡猾さを身に着けながら、複雑多岐にわたり、混乱の様相を示している世界に真の平和の光を照らすものとならなくてはならない。

⁵⁰ Kanzo Uchimura, *A New Civilization, The Japan Christian Intelligence*, 1926,4.5

⁵¹ 伊勢崎賢治（東京外国語大学大学院教授）は、アフリカやアフガンなどで、武装解除を実践してきた方であるが、その体験をとおして次のように述べている。「非戦主義は究極の国防力になりうるか」、まさに憲法9条がこれです。日本は「美しい誤解」をされており、これは大変な防衛力になっています。僕が当時いた日本大使館は先進国の中で武装警備がない唯一の大使館でした。あれでよく狙われないなと思っていましたし、事実、狙われなかった。いままでアルカイダによって日本資本のホテルが狙われたことがあるでしょうか。これはすべて防衛力です。「美しい誤解」による防衛力です。 <http://www.annie.ne.jp/~kenpou/news2/ns75.html>（検索日 2013.1.28）